

『零と記憶と少年の話』
零団地

Ⅱ 少年の独白 Ⅱ

僕の存在は極めて稀有だと思う。それを自覚したのはいつ頃だったのか、今となってはわからないことだけど、それは疑いようのない事実だ。どのくらい確実かと言うと、たった今この文を読んでる人がいるくらい確実なのだから真正銘、未来永劫の確実さだろう。

僕の存在は三でなりたっている。ある男とある女の間にもし子供が生まれていたら——それが僕だ。

つまりはある男とある女は結ばれなかった、そういうことだ。

本来ありえないはずの僕が何故存在出来たのか、何故自分自身の存在が三だと分かるのか、それはわからないことだし興味もなかった。

僕の目的はただ一つ、過去を変えること。その目的を明確に認識出来てさえいけば他は些細なこと過ぎない。過去を変えることさえ出来れば他は何もいらぬ。そう何もかもいらぬんだ。

過去を変えることを誰かが、例えば神様とか仏様とか便宜上は何でもいいんだけど、その誰かが、何かが、僕にどうやらチャンスを与えられたらしい。

僕がこの世界に存在出来る時は、ある女こと『坂戸』とある男こと『佐藤』が出会うためのキーポイントのみだ。具体的な説明をすれば、坂戸と佐藤が出会うきっかけから、恋に落ちるためのきっかけ。そのきっかけは間接的なものから直接的なものまで多岐に渡る。僕の役割はそれを自分が望んだ用に誘導する導き手。

今日これまで僕は数十回この世界に存在することがあって、初めの内は自分が何故ここにいいのかかわからず、右往左往するばかりでデータラメな行動をおかしてしまつたが、数を重ねる内に自然と自分の存在意義について理解していった。それは赤ちゃんが自然と歩くようになり、しゃべるようになる自然さと似ている。

自分の存在意義を理解した時から、無知だつた自分に後悔し、無知だつた自分と決別し、僕は過去を変えるための努力を惜しまないようになった。

過去を変えるためのピースを見つけ、少しずつ少しずつ繋ぎ合わせ、点を線に変えていく作業は容易なことではなかった。僕は本気で無知だつた頃の自分を殺したくなつた。……この場合自分の存在が生きている、というカテゴライズに属してるかは謎だつたけど。

数十回と数十年の歳月の集大成。今日この日が僕に与えられたラストチャンス。僕の望む最後のキーポイントが発生する日だつた。

||こちら埼玉県熊谷市駅構内改札前柱所||

熊谷……それは埼玉を代表する都市の一つ。僕は今、熊谷駅構内の改札前、広告ボードが取り付けてある柱に寄りかかっていた。正午を少し過ぎ、落ち着きが支配する時間に変ろうとしていたが、駅構内を移動手段に使う人々にはそんなことは関係なしなのか、騒々しく目まぐるしい人の入れ替わりようだった。

これほどまでの人々の流れを見ると、個ではない一つの流れ、思考も思想も無い灰色の濁流のようだと言ってしまう。そう考えてしまうのも自分が常識の外の存在で、日常や世の中や社会などを体験して来なかったからだろうか？

駄目だ、駄目だ。無駄なことを考えてしまっている。他に考えるべき重要な問題が残っているだろう。どうも長考する時間があると思いが寄り道してしまう。今一度、自分の目的を再確認にしろ雑務を頭に入れるな、この状況はただ目的の人に会うために苦勞する現状の一つに過ぎないと頭に叩き込め。

そう、再確認だ。再確認が重要だ。頭の回路を冷却させる作業に入ろう。

僕はこの世界に存在するときには、ある程度の前後情報が自然と頭の中に知識として組み込まれていて、今日この場所にいれば自然と目的の人に会えることはわかっていた。目的の人は、とある男に会いに東京を目指し新幹線に乗るも、あるささいな勘違いを起こし熊谷に間違つて

降りてしまうのだ。

そこで今回の僕がやるべきことは目的の人を目的地まで案内すること。そのままの意味で正しく(ただし)正しく(まさしく)僕は導き手として今回存在している。

このまま僕という導き手が介入しなければ目的の人は目的地にたどり着くことがないまま生涯を終えることになる。それをどんな手を使っても、例え誰かの存在を消すことになったとしても変えなければならない。それ程の覚悟が僕にはあった。

しかし残念ながらそこまでの覚悟があっても一つ重要な問題が残されていた。それは気合、覚悟うんぬんで解決する問題ではなく、僕に多大な心労をあたえてくれやがっていた。

相手は僕という存在を認識していない。つまり現状では赤の他人なのだ。直接対面するのは今回が初めてのケースだった。

相手に不信任かつ猜疑心を抱かせない方法で目的地まで案内しなければいけず、僕は思考、考察、選択、繰り返し返してきたのだけど、存外難しく未だ思いついていないまま駅構内の柱に寄りかかっている現状だ。

あと数分もすれば改札口から相手はやってくるだろう。それまでに妙案を考えなきゃいけないのだが、これまで頭をひねりにひねりつくし、煮汁も出ないほど考えつくしたにも関わらず何一つ思いつかない現状では到底無理な話だった……。

数分後、目的の人が改札口から出て来た。結局何も思いつかないまま、とりあえず彼女に近づこうと柱から離れたとき、ふと、自分が寄りかかっていた柱の広告に目がいった。

そのとき僕の脳内に電流が走り、すばらしすぎる妙案を閃めいた。やはり僕は神様という存在に愛されているのだとますます確信を持ち、自信を持って相手に近づいていく。背筋が力カシの用にピンと伸びて、歩きも軽快だ。近づくにつれ相手の輪郭が徐々に鮮明となっていく、彼女の可愛らしい顔をこの目でじっくり確認することが出来る距離まで詰めていくと、僕は彼女の肩を叩きこうつぶやいた。

「貴方も人探しをしているの？」

——柱に取り付けてあった広告は占いの広告だった。

